2．富士山・愛鷹山麓における横穴式石室の位置づけ

ここでは、船津L-第171号墳、須津J-第６・118・159号墳、鵜無ヶ淵・間門E-第６号墳の横穴式石室について、残存状況の良好であった須津J-第６・159号墳を中心に富士山・愛鷹山麓の横穴式石室との比較検討からその位置づけを考えておきたい。

（1）造付箱形石棺と屍床仕切石について（第112図）

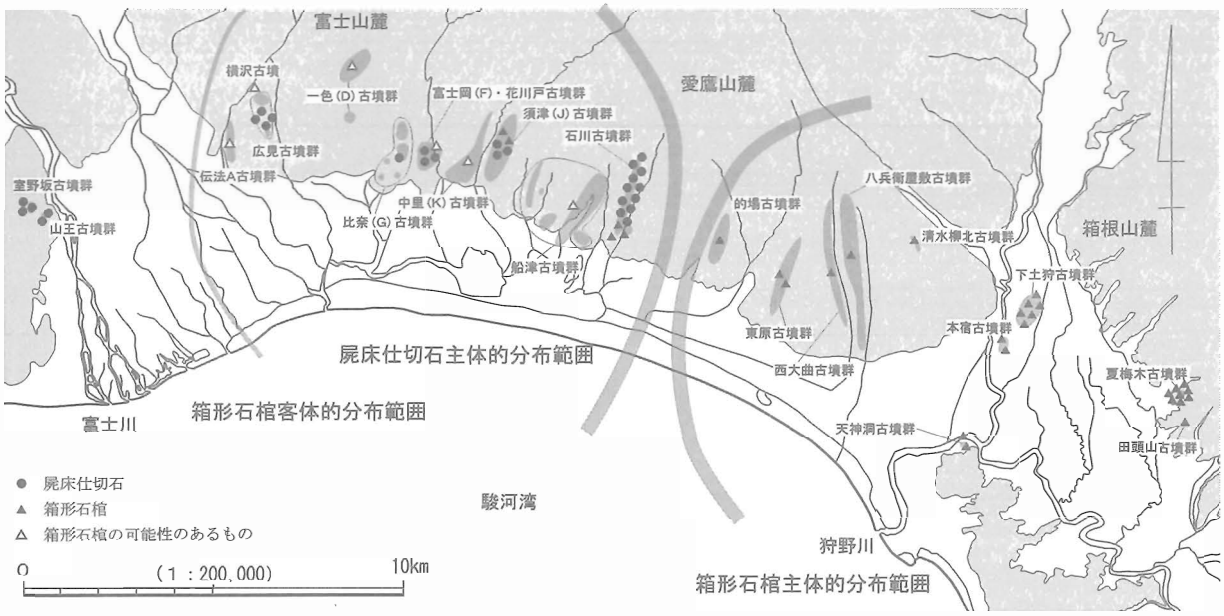
東駿河地域を特徴づけるものに無袖形横穴式石室とともに、石室内に設けられた造付の組合式箱形石棺と床面を仕切る屍床仕切石の存在がある（菊池2005）。以下、その分布の傾向から、今回調査した５基の古墳の位置づけをみておきたい。

箱形石棺の採用　箱形石棺を採用する地域は東駿河地域でも黄瀬川流域や愛鷹山東南麓などの東の地域に多く、現状で愛鷹山西南麓の群集墳での採用は少なく、富士山麓の古墳ではほとんど確認されないようである（註１，井鍋2003・2004・2005）。

屍床仕切石の採用　石室床面を区切る屍床仕切石は、富士山麓、愛鷹山西南麓に多いが、箱形石棺が多い箱根山西麓や愛鷹山東南麓にはほとんど存在しないといえる。また、屍床仕切石を採用した古墳と箱形石棺の両方を採用した古墳は、須津J-第139（大塚団地第１）号墳のみであり（註２）、箱形石棺の採用と屍床仕切石の採用は排他的であった可能性が高い。

箱形石棺と屍床仕切石の分布からみた地域色　屍床仕切石、箱形石棺の分布から東駿河地域をみると、①箱形石棺が多く、一部に刳抜式石棺が用いられ、屍床仕切石の採用がほとんど確認できない、箱根山西麓、愛鷹山東南麓地域、②箱形石棺と屍床仕切石の両者が採用される愛鷹山西南麓、③屍床仕切石が採用され、箱形石棺が用いられることは稀な富士山南麓～富士川西岸の３地域に大きく区分できる可能性が高い。②と③の地域区分が難しいが、沼津市石川古墳群（沼津市教委2006）で箱形石棺と屍床仕切石が混在すること、その西側の船津古墳群以西では箱形石棺が少なくなることを考慮すると、この石川古墳群とその東の東原古墳群・的場古墳群あたりで区分できる可能性が高い。

今回調査した５基の古墳は、箱形石棺が須津J-第６号墳、屍床仕切石が須津J-第118・159号墳、両者ともに確認されない船津L-第171号墳、間門E-第６号墳である。須津古墳群、船津古墳群は上記の②の地域、間門古墳群は上記③の地域にあたり、地域的特徴を反映しているといえる。



第112図　箱形石棺と屍床仕切石の分布

須津J-第６号墳の箱形石棺　須津J-第６号墳の箱形石棺は、井鍋誉之氏分類の配置ａ類であり、東駿河で最も多い配置方法を採用している。板石の組合せ方式は、縦継方式である。縦継方式は６世紀末以降東駿河地域で一般的に確認される方法である（井鍋2004）。

なお、須津J-第６号墳をはじめ東駿河地域の箱形石棺は蓋石を伴う「閉じられた」石棺である。東駿河の石室の系譜関係が想定される九州は「開らかれた」棺であり、箱形石棺からみると九州とは系譜関係が異なると考える。箱形石棺で「閉じられた棺」（かつ無袖形石室である）は、寺口忍海古墳群（H14号墳など，橿考研1988）や寺口千塚古墳群（14号墳，橿考研1990）などで確認できることから、これらの古墳群とは石室形態（井鍋2003，鈴木2003・2010）だけではなく、棺の取り扱い方も共通している。

須津J-第６号墳とJ-第118号墳からみた須津古墳群の古墳築造集団　J-第６号墳とJ-第118号墳は隣接する古墳であるが、前者は箱形石棺、後者は屍床仕切石を採用する。これらは特徴的な分布を示す内部施設であることから、石室構築にあたっての交流関係や系譜の違いを示している可能性が高い。古墳時代後期後半以降の隣接する古墳は同一集団による累代的な築造と考えられがちであるが、この２基は内部施設の相違からみれば、隣接しながらも同一古墳築造集団の累代的な築造ではなく、別の（性格を異にする）古墳築造集団により築造された古墳が隣接している可能性を想定しておく必要があろう。

（２）石室について（第113図）

各古墳の時期　今回調査した３古墳群５基の古墳は、船津L-第171号墳が遠江Ⅳ期前半、間門E-第６号墳が遠江Ⅲ期後葉、須津J-第６・159号墳ともに遠江Ⅲ期後葉に遡る可能性があるもののⅣ期前半の築造である可能性が高い。J-第118号墳もⅣ期前半の可能性が高い。

石室に共通する特徴　奥壁に１枚の鏡石を設置する点が共通し、これは東駿河地域の一般的傾向に合致する。また、側壁には幅１ｍ程度のやや大型の石材を用いる部分もあるが、基底石に２段目以上の石材よりも大きい石材を使用することはなく、各段に同様の大きさの石材が使用されている点も共通する。これは今回調査した５基だけではなく、富士山、愛鷹山西南麓の古墳群の一般的な特徴といえよう。

相違する特徴　一方、相違する点も確認できる。須津古墳群では３基の古墳で段構造が確認できるが、段構造部分に相違がある。東駿河地域の段構造部分の特徴については木ノ内義昭氏（木ノ内1998）が分類を行っているが、詳細に分類するとやや異なるためここでは個別にみておきたい。

須津J-第６号墳の段構造　６号墳の墓壙からやや離して複数の礫を置き、１～数段積み上げる方法は、東駿河地域の段構造では最も一般的な構造で、沼津市秋葉林１号墳や石川古墳群など、箱根山西麓を除く、富士山・愛鷹山麓で確認されている。この地域で最も採用された構築方法である。

須津J-第118号墳の段構造　118号墳は石室開口部に石室幅と同幅程度の大型の石材を、石の長軸を石室の主軸に直交させて据え框石としているが、このような段構造（框石）は富士市船津L-第209・213号墳、富士市横沢古墳、沼津市的場古墳で確認できる構造で、J-第６号墳のような段構造よりも少ないが、富士山麓・愛鷹山麓で広域的に確認できる構築方法である。

須津J-第159号墳の段構造　墓壙を竪穴状に深く掘り込み、その墓壙際に礫を積み上げる構造は、富士市中原第４号墳、片倉１号墳などで確認できる構造である。この方法については、木ノ内氏によれば富士川西岸の山王古墳群や妙見古墳群など比較的築造時期が新しい古墳群に多くみられる傾向にある（木ノ内1998）。この構造も東駿河地域で広域的に確認できる。

段構造の採用　このように一言で段構造といっても木ノ内氏の分類にあるように、いくつかの種類に区分することができる。こうした段構造（框石）の採用については、上記したように同一群集墳内でも異なる一方で、異なる群集墳に所在する古墳と共通することから、石室構築にあたって東駿河地域内で頻繁な情報交換・共有が行われた可能性が高い。

（3）須津J-第６号墳と須津J-第159号墳の差異からみた東駿河地域の無袖形石室

須津J-第６号墳とJ-第159号墳は同一古墳群にあって近接する古墳で石室に使用される石材や石室の形状などに共通性があるが、墓壙の形状、段構造の造りが大きく異なる（第40表）。また、この両者は後述するように鉄鏃の平根式の採用にも違いがあり、J-第６号墳が尖根式のみ、J-第159号墳は尖根式と平根式の両者を副葬している。上述したようにJ-第６号墳の箱形石棺は愛鷹山東南麓以東との関係が想定できる一方で、J-第159号墳の屍床仕切石は愛鷹山西南麓の特徴的な構造である。同一古墳群にあっても、このように石室の造り、副葬品が異なる点は、両者は交流範囲や性格が異なる集団により築造された古墳であったと考えることができる。

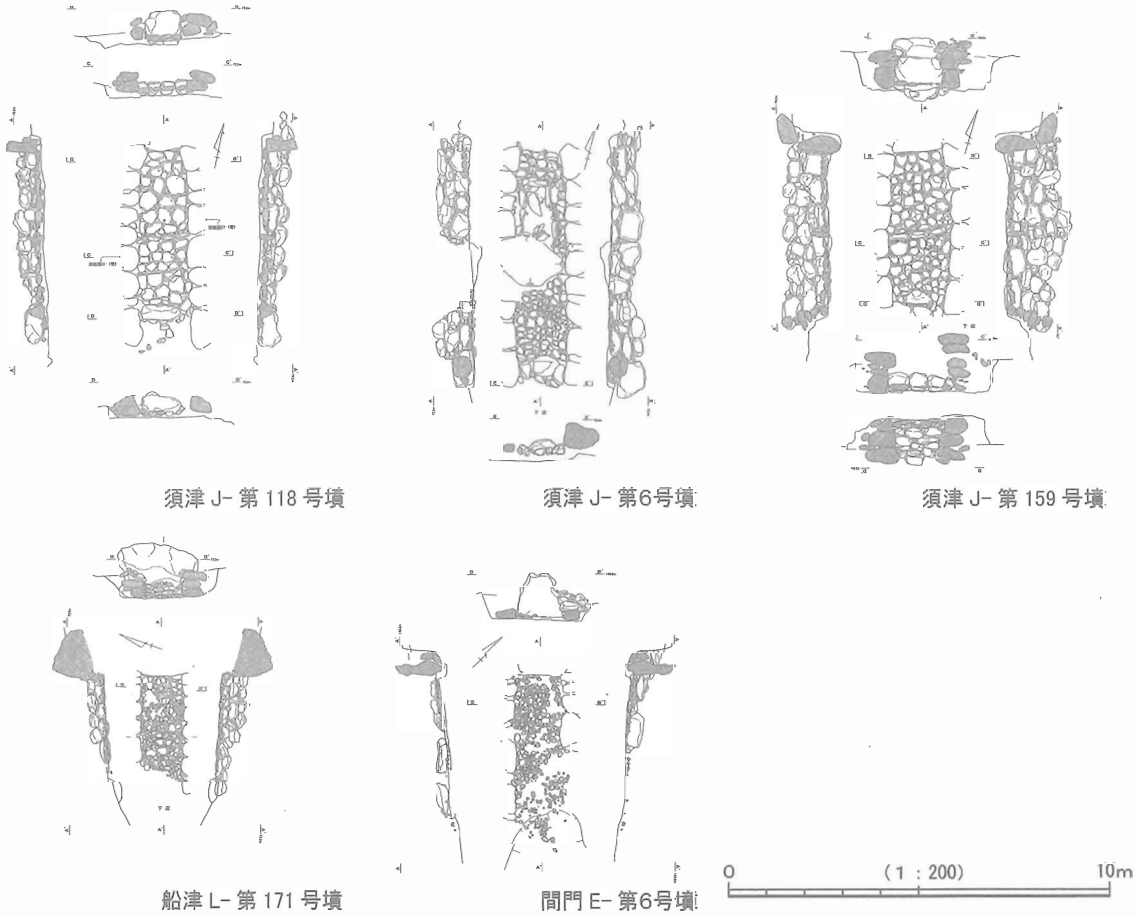
第40表　須津J-第６号墳とJ-第159号墳の比較

項目	須津J-第６号墳	須津J-第159号墳
埋葬施設	無袖形石室	無袖形石室
段構造	あり？	あり
段の高さ	0.4m	0.8m前後
墓壙	竪穴状	深い竪穴状
箱形石棺の有無	あり	なし
屍床仕切石の有無	なし	あり
鉄鏃	尖根式のみ	平根式＋尖根式
馬具	大型矩形円環轡	大型矩形円環轡
特徴的な副葬品	釧	刀子が多い

（4）東駿河地域の古墳時代後期～終末期の墓制の展開

東駿河地域は、横穴式石室はすべて無袖形石室という全国的にみても非常に地域色の強い地域といえる。こうした類似性が高い東駿河地域は横穴式石室の構造分析からは、富士川西岸～富士山麓、愛鷹山西南麓、富士山東南麓～箱根山西麓の３小地域に区分できる（井鍋2003）。この区分は今回の調査した古墳の分析から導き出した箱形石棺や屍床仕切石の採用状況からも追認できる。

一方、それぞれの小地域内にある古墳すべてが同一構造というわけではない。須津J-第６・118・159



第113図　今回調査した横穴式石室の比較図

号墳の調査結果と既往調査の成果を勘案すると、箱形石棺や屍床仕切石の情報、段構造の構築方法など、①同一古墳群内の隣接する古墳間でも相違が確認できる、一方、②別地域・古墳群にある古墳の構造と共通することが確認できる。

つまり、①からは同一古墳群にあっても情報を共有せず、異なる石室構造を築く集団があり、また須津J-第６・118号墳の比較とも併せて考えると、別の集団により築造された古墳が隣接していることが判明する。また②からは、石室は古墳築造集団それぞれが全く独自に構築していたわけではなく、東駿河地域の中で情報共有を行う集団があったことが判明する。①・②から石室構築に当たっての情報共有や同一の性格を有する集団は近接する古墳間である場合もあれば、別の古墳群の古墳築造集団の場合もあったことが想定できる。

東駿河地域は同一古墳群に所在しながら隣接古墳間で石室の構造が異なる点は古墳群を築造した集団内で石室構築に当たっての規制の弱さを示していると考えられる。一方で他の古墳群や別の小地域の古墳との共通する方法を採用する点は東駿河内部で交流が活発に行われていた証拠となる。

さらに、石室情報の共有が同じような性格をもつ集団により共有されたとする仮定が正しければ、須津古墳群のように同一古墳群を構成する集団内に複数の性格（職掌など）を有する集団が含まれていたといえるとともに、同一の性格を有する集団が東駿河地域内に散在していたとも考えられよう。

註

1　確実に箱形石棺が確認されているのは須津J-第６・139号墳で、それよりも西側の東駿河地域では、伝法A-第２号墳や中里K-80号墳など数基で想定されるにすぎない。

2　報告書（富士市教委1976）の第５・６図をみると奥壁側に設置した箱形石棺の蓋石と同じ高さで箱形石棺の南側に板石の断面が確認できる。この石材が、蓋の一部だとすれば、屍床仕切石とされる部分と箱形石棺の間にも蓋石が存在したことになり、この部分に奥壁側の箱形石棺と直交する箱形石棺が存在した可能性もある。

　また、沼津市石川23号墳（沼津市教委2006）に板石を用いた屍床仕切石の奥壁側に板石が３枚確認されており、この古墳も屍床仕切石と箱形石棺が組合わされている可能性がある。

参考文献

井鍋誉之　2003「東駿河の横穴式石室」『静岡県の横穴式石室』 静岡県考古学会
井鍋誉之　2004「まとめ」『田頭山古墳群』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
井鍋誉之　2005「組合式箱形石棺をもつ横穴式石室」『研究紀要』11　静岡県埋蔵文化財調査研究所
植松章八　1976「組合せ式箱形石棺について」『中里大塚団地古墳』 富士市教育委員会
橿原考古学研究所　1988『寺口忍海古墳群』
橿原考古学研究所　1990『寺口千塚古墳群』
菊池吉修　2005「山麓の古墳と海辺の古墳」『沼津市史』通史編上巻　沼津市
菊池吉修　2008「駿河における無袖式石室」『東国に伝う横穴式石室』 静岡県考古学会
菊池吉修　2010「駿河」『東日本の横穴式石室』 雄山閣
木ノ内義昭　1998「前壁状の封鎖施設を有する横穴式石室の意義」『静岡の考古学』『静岡の考古学』編集委員会
静岡県考古学会　2003『静岡県の横穴式石室』
志村　博　1981「終末期の竪穴状石室について」『東富士臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書』
志村　博　1987「後期古墳に於ける特異な石室構造について－富士市域を中心として」『静岡県博物館協会研究紀要』11　静岡県博物館協会
鈴木一有　2001「東海地方における後期古墳の特質」『東海の後期古墳を考える』 三河古墳研究会
鈴木一有　2003「東海東部の横穴式石室にみる地域圏の形成」『静岡県の横穴式石室』 静岡県考古学会
鈴木一有　2010「駿河東部における無袖石室の史的意義」『東日本の無袖石室』 雄山閣
沼津市教育委員会　2006『石川古墳群』
富士市教育委員会　1976『中里大塚団地古墳』